

くじらっこ見守り隊（秋田県）

活動地域

男鹿市は、秋田県の西部のほうに飛び出ている男鹿半島にあります。人口は約3万1,000人、世帯数は約1万3,000世帯を数えます。一昨年、市町村合併をしまして町が少し大きくなっておりませんが、山と海に囲まれているため人口密度自体はすごく低い所であります。

男鹿といえば秋田美人ですよね。ナマハゲも有名で、歴史ミステリーなまはげ館があります。また、男鹿半島は地学的、地質学的に非常に研究材料として評価が高いことが多いということで、平成23年9月に日本ジオパークというものに認定されております。

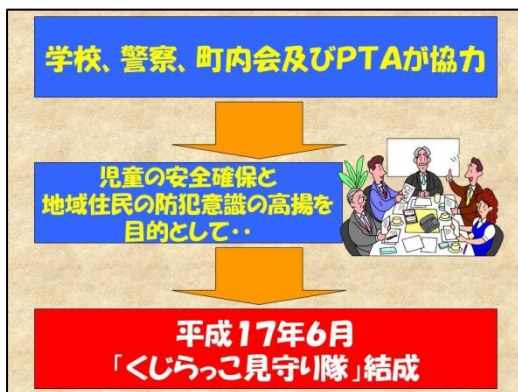
男鹿半島は三方を海に囲まれていますので、海の幸に非常に恵まれております。県の魚であるハタハタはうろこがない魚ということで、昔からお殿様の献上品として重宝されておりました。このハタハタという魚は、海が荒れる、雷が来ると捕れるということで、昔から命がけの漁をしてきたというふうに聞いております。

明治のころ、日本海沿岸では鯨が捕れていたそうです。その鯨を売ったお金を使って、この地元に学校を造ろうということで学校ができました。鯨学校という愛称で親しまれた学校が、現在の男鹿市役所の裏手の中腹にあります。昔は日本海のほうには鯨が非常に多かったという歴史も学べるかと思えます。



団体の概要

団体概要です。船川第一小学校の学区内で、帰宅途中の児童が不審者に遭遇するという事件がありました。児童の登下校を見守る組織の必要性が、地域・学校の課題となりました。学校、警察、町内会及びPTAが協力し、児童の安全確保、地域住民の防犯意識の高揚を目的とし、平成17年6月に私たちくじらっこ見守り隊が結成されました。くじ



らっこ見守り隊は、町内会員・PTA・少年保護育成委員・防犯指導隊員等で構成されており、PTA世代が中心である平均年齢37歳の比較的若い世代と、定年を迎えた祖父母世代がお互いに協力しまして、親世代のコミュニティーづくりと祖父母世代の生きがいを中心に活動しております。

活動の概要



活動内容の一つは登下校時の見守り活動です。「おはよう」「おはようございます」このようなあいさつ、最初はなかなか照れ臭いものですが、毎日毎日続けるとお互いに慣れてきて、子供たちの反応・あいさつもだいぶ変わってきました。元気よくなってきました。あいさつを毎日していると、不思議なもので、子供たちがなんかいつもと違うんじゃないかなっていう、心の中にまで入っていきけるようになりました。ちょっと文字にしましたけど、「おはよう、今日も元気かい」というふうに、おはようございますという元気な言葉の中に、小さな声ですね、もしかしたら心の声かもしれない、あのねっていうその言葉をだんだんに見抜けるようになってきました。



2番目としまして、除雪ボランティアを実施しております。小学校の冬季のPTA活動、

それから授業参観などのときに、子供たちが車に巻き込まれないように除雪活動を実施しています。秋田県内の約90パーセントが特別豪雪地域と指定されているということで、この写真はまだ2月ごろの写真ですが、大人の胸ぐらいまである、子供だったら埋まってしまうぐらいの雪の量だったので、みんなで頑張りまして、除雪をしてきれいになりました。

3番目、青色回転灯装備車両による地域巡回などです。青色回転灯装備車両は私有車で、



1台しか私たちは持ってありませんので、商売をしながら、出前をしながら、出張巡回をしたり、登下校の時間帯、また薄暗い薄暮の時間帯を狙って実施しています。



4番目は情報の共有です。小学校が管理しております、くじらっこ見守り隊通信を年に2度ほど発行しております。写真の通信は、平成24年度の東北防犯優良団体の表彰を受けた際に作成してくれたものです。また、男鹿市内の学校で初めて、船川第一小学校は緊急メール一斉配信システムを導入致しました。この緊急メール一斉配信システムは、学校側で操作すると登録している人全員に同じ情報が文字で伝わるというものでして、このシステムを活用した児童引き渡し訓練を、昨年と今年やっております。この児童引き渡し訓練は、東日本大震災ももちろんありますが、今年は日本海中部地震から30年です。日本海中部地震では、遠足に来ていた小学校の児童が津波に巻き込まれて13人亡くなっています。その教訓を風化させないことが目的です。訓練の中では、落下物から頭を守るために、教科書などを頭の上に置くというようなことも、われわれくじらっこ見守り隊の隊員から学校に提案して、やってもらっています。

5番目、地元警察との連携、防犯教室等への参加です。この辺はどこの団体も実施していることだと思います。

6番、地域危険箇所の確認パトロールです。先ほど、青色回転灯の装備車両は1台しかないとお話しましたが、黄色いラミネート加工をした、パトロール中というものをわれわれの普通の私有車に表示をして、くじらっこ見守り隊が地域を巡回しているというのをアピールしています。

活動の効果と今後の課題



活動効果です。活動を続けて数年したある日、薄暮の時間帯、青色回転灯装備車両が地域を巡回しているときに、一人の男の子が道路で泣いておりました。すぐに車を止めて、その子供に声を掛けました。どうしたのと聞くと、遊びに夢中になってしまって、お家に帰れなくなってしまったと、迷子になってしまったということでした。すぐに警察、保護者のほうに連絡し、家族のもとへ帰したとい

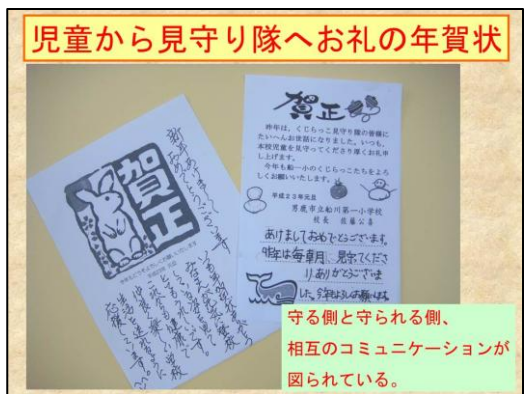
う事案がありました。このことは、学校で行われている見守り隊の感謝の集いの中で、子供のほうから発表してくれました。子供たちの言葉から、くじらっこ見守り隊の人が来てくれて安心しましたという言葉がありました。われわれの活動が、学校のほうでも発表、また子供たちの言葉から出てきたということです。児童から見守り隊へのお礼の年賀状です。守る側と守られる側、相互のコミュニケーションが図られております。これは学校のほうから、子供たちが書いたものがわれわれくじらっこ見守り隊に来まして、われわれ見守り隊のほうも子供たち宛ての年賀状を学校に出すといった活動もしております。

このような活動を続けることによって、今年の冬、ある出来事がありました。ある少年が下校時間中にどこからか助けてという声を聞きました。なんか変だなと思って周りを見渡したところ、1年生の子供が雪に埋まっていた。先ほど除雪の話をしてきましたが、1



「くじらっこ見守り隊」等の地域活動に積極的に参加している親の背中を見て、子供たち自身が「みんなが助け合う相互扶助の精神」を学び、浸透してきていると信じています。

年生の子供が埋まっていたということで、5年生の子供がその1年生を一人で抱え上げて雪の中から救出。助けられた子供は安心感で泣き出してしまっていて、もうどうにもできなくなってしまったと。そうこうしているうちに後ろから友達が、5年生、3年生、1年生と集団で来ましたので、4人で協力して、5年生は埋まっていた1年生をおんぶしてあげて、ある子はその子の長靴を持ってあげたり、ある子はランドセルを持ってあげたり、ある子はジャンパーを貸してあげたりということで、距離にして約1キロぐらい、上り坂をその子の家まで送り届けるということがありました。



児童から見守り隊へお礼の年賀状

守る側と守られる側、相互のコミュニケーションが図られている。

こうしたエピソードから地域活動に参加している親の背中を子供たちが見ることによって、子供たちに「みんなで助け合う相互扶助の精神」が浸透していることを実感しております。

このことがわれわれの活動の成果の最大かなと思っています。

今後の活動に関する課題であります。先ほど紹介しました、今年日本海中部地震から30年。昨年12月、初めて児童引き渡し訓練を実施しました。このときは大雪で、天候に左右されない引き渡しの方法についてもっと検討が必要だなと感じました。

また平成25年3月、これは秋田県内の中でも一番に男鹿市内が津波ハザードマップの見直しを実施しました。これまでは最大の津波浸水深が1メートルであったことから、そんなに被害はないと高をくくっていたところではありますが、10メートル以上に大幅に変更となって、男鹿市の防災無線の機械がある市役所の3階を突き破るほどの津波が来るということになりました。その結果、子供たちの通学路はほとんど浸水します。もちろん帰る家

もなくなります。そういった状況を考えまして、災害時に安全かつスムーズな引き渡しができるような計画の策定、また訓練が継続的に必要ではないかなと考えております。

東日本大震災を含む被災体験を語り継ぐと書いてありますが、私たちのこのくじらっこ見守り隊の中には、岩手県山田町から被災し、私たちと一緒に活動している2家族があります。その方たちと日本海中部地震の被災体験を語り継ぎ、また学校の伝統行事である「いさな」を通じた、地元への愛着心の高揚を図り、くじらっこが育ち、大きく成長し親となり、地域の見守りの目となっていく、そんな環境づくりに尽力していきたいと考えております。

最後に「いさな」とは、地域みんなが協力して、地引網で鯨漁をする様子を表現した踊りであります。これは地元船川第一小学校の伝統行事であり、毎年最上級生が後輩に直接指導をすることで受け継がれていく踊りであることを紹介して、私たちの活動の発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答

●質問 児童の引き渡し訓練を行っているというお話がありましたが、このように具体的な事象を想定した上で訓練をするということを通じて、全体の防犯活動といったものに対して効果や課題があると何かお気づきはありましたか。

○回答 メール配信システムというのは、地震や津波、災害だけではなく、不審者情報や学外での起きた火事など、一斉に保護者や見守り隊、ボランティアの皆さんに配信されるもので、児童は保護者へ引き渡したり、見守り隊がサポートしたりして下校することになっています。くじらっこ見守り隊は、引き渡しのできない児童を、同じ方面の保護者が連れて行くなどの協力をしております。引き渡し訓練を定期的に行うことで、万が一地震や津波、災害が起こったときに、安全にスムーズに対応できるようにしています。

日本海中部地震から30年

平成24年12月 初めて児童引き渡し訓練を実施
→天候に左右されない引き渡し方法の検討

平成25年3月 津波ハザードマップ見直し
→最大の津波浸水深が大幅変更(1mから10m以上)となり、通学路のほとんどが浸水

災害時に
安全かつスムーズな引き渡しができるような
計画の策定及び訓練の実施が必要

東日本大震災を含む被災体験を語り継ぐ
学校伝統行事「いさな」を通じた地元への
愛着心の高揚

くじらっこが巣立ち、大きく成長し、親となり、
地域の見守りの目となっていき、
そんな環境づくりに尽力していきたい。